

としょかんだより 第92号

2015年 6月開館予定表

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30				

2015年 7月開館予定表

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

	9:00-20:00		9:00-17:00
	13:00-20:00		休館日
	9:00-19:00		

発行所

〒648-0280

和歌山県伊都郡高野町

高野山 385

高野山大学

図書館閲覧室

TEL

0736-56-3835

FAX

0736-56-5590

E-mail

service-lib@koyasan-u.ac.jp

開館時間の変更について

6月より図書館の開館時間が通常通りに戻ります。

これからも図書館をどうぞご活用ください。

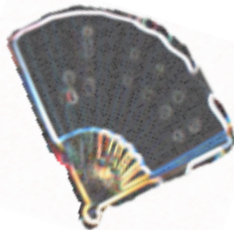
開館時間は下記の通りです。

平日：9：00～20：00

土曜：9：00～17：00



『能の世界-謡と仕舞-』



平成27年度 第1回 戸田文化講座を開催します。

事前申し込みは不要となっています。

皆様、お誘いあわせの上どうぞご参加ください。

日時：6月16日(火曜日)16時40分～18時00分

会場：高野山大学2階202号教室(和室)

講師：本学助教 浜畑圭吾先生

サーバーメンテナンスのお知らせ

6月19日(金)図書館におきまして

サーバーメンテナンスを行います。

そのため、図書館OPACが終日繋がりにくい状態となります。

ご迷惑をお掛けしますがよろしくお願い致します。



ベスト10コーナー

企画コーナー下部に毎月更新で全国書店ランキング10位までの図書を開架しています。

梅雨時は気分まで落ち込み気味ですが、気分転換に今まで



読んだことのないジャンルに挑戦してはいかがでしょうか。

※過去のランキングの図書はベスト10横の棚にございます。

－ 説話の森 (3) －

高野山大学教授 図書館長 下西 忠

説話の魅力、それは本文の正しい解釈によって理解できる。今回の説話の舞台は比叡山。桜の花が散るのを見て児が泣いているはなしを取り上げる。短いので原文をあげる。やはり原文でなければ、臨場感が伝わってこない。

今は昔、田舎の児の比叡の山へ登りたりけるが、桜のめでたく咲きたりけるに、風のはげしく吹きけるを見て、この児さめざめと泣きけるを見て、僧のやはら寄りて、「などかうは泣かせ給ふぞ。この花の散るを惜しう覚えさせ給ふか。桜ははかなきものにて、かく程なくうつろひ候ふなり。されども、さのみぞ候ふ」と慰めければ、「桜の散らんは、あながちにいかがせん、苦しからず。我が父の作りたる麦の花の散りて、実の入らざらん思ふが侘びしき」といひて、さくりあげて、よゝと泣きければ、うたてしやな。(宇治拾遺物語)

説話の内容は明白。桜の花が散るのを見て泣いている児を慰めようとしたが、思いがけない返答がもどってきたはなしである。西谷元夫氏が次のようなことを述べている。本文の説明もわかりやすく説明しているので紹介したい。

この説話は桜の花の散る様子に対して、児と僧との感じ方の相違が記されている。児の方は、父の作った麦実が出来ないことを心配するといった現実的な考えで、風流さまでは至っていない。僧の方は、花はこのようにはかないものだという無常感に立ち、花の散る様子から風流さを感じとっている。この二人の会話に対して、この説話の作者は、「うたてしやな」と述べて児の無風流さに批判的である。しかし、別の面から見れば、児の考え方も当然で、麦の不作を考えれば、風流心どころではないのである。(明解シリーズ「宇治拾遺物語」有朋堂)

また、日本古典文学全集『宇治拾遺物語』の解説でこのようなことが書かれている。

「うたてしやな」と感ずる主体は誰か。直接には僧ではあるが、間接には作者でもあり、さらに読者でもある。子供の泣くのは 僧が予想したような、優雅風流なロマンチズムのためではない。その案外ちゃっかりした現世主義に、僧のせつかくの感動が どんでん返しを食うおかしさ、みじめさ、それがこの評語であり、一編のやま場でもある。



この説話のポイントは話末の評語「うたてしやな」(がっかりさせられたことよ)である。それを感じた主体は僧であり、また作者でもある。「麦の不作を考えれば、風流心どころではない」とか「ちゃっかりした現世主義」はそうなのだが、もう少し踏み込んで解釈する必要があるだろう。ここは父のことを心配しているのではなく、自分のことを心配していると理解するのが妥当だろう。つまり、父の収穫が期待できないということは、言い換えれば、現在の自分の生活がこのまま維持できるかということをお心配して泣いたというのが現実的ではないか。子どもというものは、昔も今も自分のことしか心配しない、そういうものではないだろうか。僧も作者も直感的にそう感じたと思う。それが「うたてしやな」の評語ではないだろうか。